

聞其說。則且視爲迂濶而無當。學者退處于野。能痛然不拔。自葆其真者。蓋又絕鮮。大氏稗販泰西。忘其所自。云々

と、これが反動的に國學を鼓吹する同人の舉に出づるを知るべし、第一期は昨年九月の刊行に係り圖畫、通論、學術、文苑、小説、雜著、記事、通訊等の各項に分類し圖畫に新出三體石經拓本、楊子鶴講牛冊、陶甞如風緊寒鴉陣陣圍扇面、吳待秋聽社圖立幅、通論に國學通論（孫世揚君）、文學管窺（同君）、學術に新出三體石經攷（章炳麟君）、釋皇（汪榮寶君）、音略（黃侃君）、詞言通釋（鐘欽君）、法言疏證別錄（汪東君）、等見るべきものあり、華國月刊社發行、全年十二冊郵稅共五元五角

●華國 第一卷第二期

昨年十月の發行に係る。圖畫に清湘老人搜奇圖幅、楊子鶴講牛冊、陳師曾山水扇面、黃濱虹山水立幅、古印集拓、あり、通論に新文學商權、學術に新出三體石經攷（章炳麟君）、歌戈魚虞模古詩考（汪榮寶君）、詞言通釋（鐘欽君）、周禮政詮（但憲君）、釋素問九州九竅之文（汪東君）、

養蠶學（汪楊寶君）等あり、國學叢刊の純學術的論文の豊富なるには若かず雖も、尙ほ一讀の價值無しとせず。〔以上那波〕

●京都帝國大學考古學研究報告 第八冊
學文學部

京都帝國大學考古學教室出版の同學研究報告の第八冊として最近印行せられたるもの、收むる處濱田教授、梅原鸚托合著の「近江國高島郡水尾村の古墳」の一編にして本年四月考古學教室の事業として徹底的調査を行へる同古墳に關する一切の研究を録せり。本文百頁は記述と考證の二編に分れて、前者は先づ古墳の位置と外形の現狀に筆を起し、内部の主柩をなす石室石棺より、發見の寶冠、沓、耳飾、魚佩、環頭太刀、鹿角製拵太刀、同刀子其他の興味ある副葬品に就いて豊富なる圖版と挿圖を加へて精査に記載をなせるもの、第二の考證編は右の記述に依り明にせられたる事實に基き考古學上の考察を試みたるものにして、古墳の外形の復原、石室と石棺、副葬品の埋没狀態、金製耳飾、金銅製裝身器、環頭太刀、鹿角製拵の太刀刀子等に分ちて論述する處あり、結論とし

て、是等を綜括して本古墳營造の實年代の西曆五六紀の間にあること、内に示現せらるゝ文化及び技術を説けり。今ま如上の記述を通覧するに第一部の遺物記載編に於いて、いたく破碎せる銅片を接合して寶冠、魚佩、沓等の珍奇なる裝身具を復原せる處、鹿角製刀飾りの着裝の原形を保てるもの、紹介と共に興味を惹くのみならず考證編にありて地籍圖の示す事實よりして現形の丸き本墳がもこ前方後同墳なりしことを考定せるは主要遺物の性質に關する研究の精彩なるを併せ見る可し。また遺跡の年代觀は考古學上の研究よりする此の種論證の範を示せるもの云ふも決して過言に非ざる可し。本古墳は副葬品の豊富なる點に於いて肥後の江田古墳に比すべし。従つて其の詳細なる紹介は學界に研究上の基準を與ふるものとして重要視す可きなり。今ま本書に依りて事實の忠實なる紹介と共に右に關聯せる研究の成果を知り得るを欣ぶ。別に末尾に金製耳飾、環頭太刀及鹿角製裝刀具の聚成圖及一覽表を附す。本文の遺物研究を併せ見るべきものなり。(岩波書店發賣五・〇〇)(梅原)

彙 報

第一號 一五八 (一五八)

●京都帝國大學文學部史學科研究旅行

昨年廿三日同廿四日の兩日を利用して、三浦教授中村講師及び天沼工學部教授の指導の下に古文書記錄建築彫刻等の實地研究の爲め、河内金剛寺及び觀心寺に旅行を企つ。一行十一名、廿三日午前八時四十分京都驛を發し、大阪を経て十一時過長野著、五十町を徒歩して先づ眞言宗御室派の巨刹にして南朝史に名高き天野山金剛寺に到る。住職會我部俊雄師の好意によつて觀養院跡に増築せられし寢殿に於て賴朝の書狀、楠木氏文書、覺阿淨覺の訴訟書類、信長秀吉家康等の文書等數百點を仔細に閱覽したりしが、就中南朝の宸翰、楠氏三代の筆蹟は云はずもあれ、秀吉の書狀に見ゆる灰汁を入れざる酒所望の文句、禪惠上人の寫經、筆錄等の跋語に見ゆる建武正平間の斷片的日記等は特に興味深く、夜に至りて筆寫する者多かりき。